自由南アフリカの声
Voice of Free South Africa

2022年４月
No. 79

～１冊の本が人生を変える～

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会
Together with Africa and Asia Association（TAAA）

2022年３月の報告と予定

■　2021年９月～2022年３月　国内では、英語の本・算数セット・サッカーボールを収集、コロナ禍のため、少人数で分類・梱包作業をおこなう。
南アでは、状況を見ながら本の配布や一部の貸し出し、司書教師対象のIT研修会などを行う

■　９月～３月　コロナ禍のため、国内の梱包作業を数回中止、または小規模に行う

■　11月～３月　本667冊南アに郵送

目次

• 楽しみながら読書に親しむ（平林薫）……2
• 日本で海外ボランティア活動に参加！（中央大学杉並高校）……6
• TAAAと私（渡恵美子）……8
• ストリートチルドレンにサーフィンを指導する（サンディーレ・ムカディ）……10
• 活動日誌……11
• 寄付金や本などを下さった方々……12

ダーバンのビーチでサーフィンを練習する少年たち（本文 P10）

TAAA 南アフリカ活動報告

楽しみながら読書に親しむことを願って！

TAAA 南アフリカ事務所　平林　薫

経済・社会参加に向けた技能習得を目指して

2021年１月より開始となった、NGO 連携無償資金協力による“ドゥエシューラ学区の生徒の経済・社会参加に向けた学力向上と基礎技能習得（第２年次）”事業は、コロナ禍による影響で活動に遅れが見られたため、３か月期間延長をさせていただき、2022年３月末に完了となった。

２年次事業開始時はコロナ禍がピークを迎えており、新学年度開始時期の遅れや、生徒のローテーション登校の継続などで、学校にとって厳しい状況であったといえる。このような環境の下で、できることをできる形で臨機応変に活動を継続してくれた対象校の校長や司書教師、図書委員会生徒たちに賛辞を贈りたい。また、現地の事業参加者を代表して、NGO 連携プログラムによる事業への資金提供、および TAAA 本部で担当してくださった皆さん、TAAA サポーターの皆様に、改めて感謝の気持ちをお伝えしたい。

学区長ザミザさんと郡教育省ンベレ氏が協力

２年半ほどの比較的短い時間で、ドゥエシューラ学区での事業が定着してきたことは、やはり学区長であるザミサさんの存在が大きかったと思う。ザミサさんは前対象地域ムタルメ学区での活動時から非常に協力的だった。彼女は今年２月末で退職されることになった。一昨年末にはコロナ感染で最愛の夫を亡くし、彼女自身も生死をさまよった。有能な学区長に去られるのは残念であるが、これまであまりにも忙しい日々を過ごされてきたので、これから少しゆっくりして、ご自身の生活を大切にして欲しいと思う。

また、すでに10年以上図書事業へのサポートやアドバイスをいただいている、郡教育省 ELITS（教育図書情報技術担当部門）のンベレ氏には、今回の事業でも大変協力的であった。彼とは常時連絡を取り合って情報交換をし、事業でもできるだけ教育省の方針や計画に沿った活動を行うようにした。ンベレ氏はウグ郡全体の学校での図書活動推進を行っているため、TAAA が一定の学区で集中して活動を進めていることを評価してくださっている。TAAA の活動で成果の出た学校や司書教師への、より進んだ研修やアドバイスもいただいており、相互に価値をもたらす“ウィンーウィン”な関係といえる。

本の返却作業をおこなう図書委員会生徒　ウマルシ小

“科目を超えた書籍の利用推進活動”

地域に図書館がなく、学校にも図書室がない地域では、“読書文化”が定着していない。地域の人たちや子どもたちは、読書は“楽しむ”というより“勉強”と考えており、学校内でも読書は“英語学習”のためだけのものと思われがちである。そこでンベレ氏は、学校での図書活動推進プログラムとして、“科目を超えた書籍の利用推進活動”を提案された。TAAA もこれまで司書教師研修会において、生徒が本から情報収集するための方法（グループでのリサーチ等）を指導してきたが、学校では教科書学習以外の活動を取り入れる時間や人材が不足しているようで、なかなか実地につながらなかった。今回は郡教育省からの正式な通達ということで強制力があり、学校側も取り組まざ

本の返却作業をおこなう図書委員会生徒　ウマルシ小

生徒同士でPC指導　メショムンヤマ小

ウマルシ小

を得ない。対象校の図書室には、まだ数は十分とは言えないが、社会・科学・歴史や伝記等の書籍も配備されており、それらが有効に利用されることを期待している。

ローテーション登校で失った時間を取り戻すため、学校では授業時間内に他の活動に携わることへの制限があり、図書活動は主に休憩時間に行われた。中には休憩時間が短縮された学校もあり、活動時間が十分に取れないことが常に悩ましかった。高校で授業時間中に図書委員会生徒と活動を行っていたところ（教師の許可を取っていたと思っていた）、教師が図書室に来て、“授業時間なので教室に戻りなさい”と叱られる場面もあった。

図書室好きな高校生だったTAAAスタッフのモンドリ

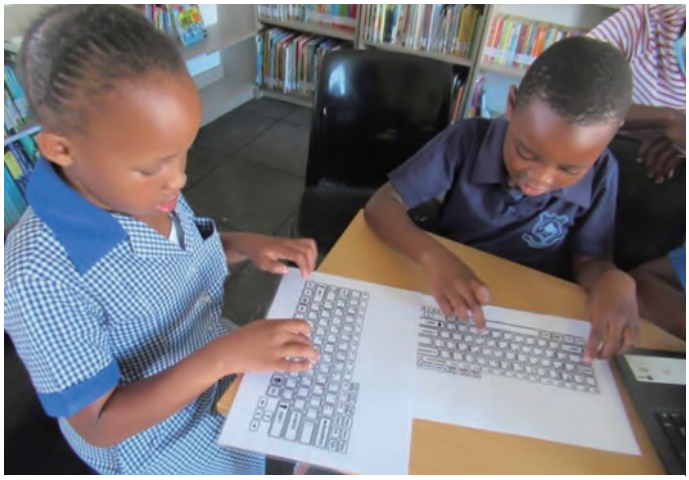
TAAA図書ファシリテーターであるモンドリ・チリザは、ムタルメ学区の高校で図書委員メンバーだったのだが、当時、私たちが不定期な時間に到着しても必ず図書室で対応してくれた。後で聞いたところ、“ちょっとトイレに行ってきます”と教室を抜け出して図書室に来ていたのだという。当時の教師には“ああやって図書室が好きで、授業中も抜け出していたけど、今、図書の仕事ができているのだからよかったわね”と言われるそうだ。教室から抜け出すことを推奨するわけではないが、図書室にいることがとても好きで、授業とは少し違った学びや経験を持ちたいという生徒たちもいるのだと思う。

これまでに会報の記事でもたびたび触れているが、学校では教室内での科目授業の他に、生徒が実技を学んだり、様々な体験をしたりする時間をもっと作れないものなのか、と感じる。現状では例え成績が良くて大学に進学できても、卒業後に就職先を見つけるのがとても困難である。まして、何とか高校卒業試験に合格して社会に出た若者や、退学してしまった若者はどこへ行けばいいのか、何をすればいいのか。失業中の若者へのはっきりとした対策、解決策は見出されていない。学校のカリキュラムの中に“技術指導”が組み込まれる日を待ち望んでいる。

図書室でIT技能の指導

２年次は図書活動推進に加えて、図書室をリソースセンターとして利用できるようノートパソコンとプリンターを配備し、図書委員会生徒を中心に基礎的なIT技能指導を行った。パソコンが使えるようになったことは、生徒たちの大きな自信につながったようだ。事業後半には履歴書作成も行い、生徒は“これをもって面接に行くぞー”と冗談を言い合っていた。また、パソコンの図書活動への利用として、これまで手書きで行っていた“本の受け入れ登録作業”をパソコン内

マングズーカ高



キーボードの練習をする　ビューラー小

で処理できるようになった。図書室で委員会生徒が他の生徒への基礎的 IT 技能ピア指導も取り入れ、より多くの生徒がパソコンにアクセスできるようにし、学校全体でのリソースセンターの利用を促進した。委員会生徒は楽しそうに、また誇らしげに友達や後輩に指導をしていた。

対象地域ではまだコンピューターを利用している家庭が少ないため、初めてパソコンに触れる生徒が圧倒的だ。対象校の中にはコンピューター室が設置され、IT 指導を行う予定をしていたケースもあるが、機材や通信の準備が不十分だったり、担当教師が配備されなかったりして、現時点で指導が行われている対象校はない。事業で図書室に導入したノートパソコンは１台ではあるが、生徒が比較的自由に利用できることが利点である。

コンピューターに興味を持って図書室を訪れる生徒がいる一方で、小学校高学年の図書委員会男子生徒から、“コンピューターを教えるから図書室に来て、って伝えたけど、休み時間は図書室より外でサッカーの方がいいと言われてしまった”との話があった。男子生徒の場合、一人がこのように言うと、ピアープレッシャーもあり、同調してしまう傾向もある。もちろん生徒の成長の過程でスポーツはとても重要であるが、この時期にライフスキルといえる読書を敬遠してしまうことは、将来の彼ら自身の生活を左右するといっても過言ではないだろう。

２週に１回は12校訪問

対象校の中には、授業時間内にクラス単位で図書室を利用する場合もあるが、前述の通りほとんどの学校では休憩時間に開室となる。 私たちは対象校 12 校の訪問スケジュールを決めて、1 週間に必ず 1 回以上訪問しているが、 各校の休憩時間はほぼ同時のため、 7 校はその前後の時間の訪問となる。対象校からは、“私たちの学校は何故休憩時間に訪問してもらえないのか”と苦情が出たケースがあり、学期ごとに訪問スケジュールの入れ替えを行うなどして対応した。私たちがどの時間帯に訪問しても図書委員会生徒がすみやかに集合して活動を始められる Beaulah 小や Frankland 小は活動がとてもよく進んでいる。これは何より校長の理解とサポートによるもので、結果的に活動が定着し、成果も見られるようになる。学校は校長の采配によるところが大きいと感じる。

ブックレビュー（読書感想）コンテスト

事業後半には、読書促進を目的とした“ブックレビュー・コンテスト”を呼びかけた。特に中高校５校にはルイス・サカールの“ホールズ（HOLES）”をブックボックスに入れて配布し、学校対抗のコンテストにしたいと考えた。同書はインターナショナルスクールから大量に寄贈頂いたので、各校に十分な冊数を配布することができた。アドベンチャー／ファンタジーのストーリーは興味深く、男子生徒でも楽しめるだろう。ところが、生徒たちからは“厚すぎて読み切れない”という声が多く届いた。233ページ、ゆっくりと時間をかけて読めるようにコンテストの期間も延長したのだが……。誰も本を借りようとしなかった Malusi 高が最初にギブアップした。他３校は貸出されているのだが、最後まで読み切れなかったのか、ブックレビューの提出がなかった。結局 Nani 高のみでコンテストが行われ、7名からブックレビューを受け取った。参加者全員に小説とペンを、最優秀生徒には辞書を贈呈した。“HOLES が厚すぎる”ということで、薄いオックスフォード出版の副読本シリーズをブックボックスに入れて中高校に配布したところ、やっとブックレビューの提出がみられるようになった。

読書嫌いの男子生徒たちの課題

対象校において全体的に順調に進んでいる図書活動ではあるが、学校によっては図書室が特定の生徒にのみ利用されているように感じることがある。私たちは主に優秀な図書委員会生徒たちと交流しており、残念だが、“一般の”生徒たちは図書室を敬遠しているようにも見える。今後の課題の一つとしては、“如何にして小学校高学年以上の男子生徒に本を読ませるか”である。例えば、サッカーの試合で活躍した生徒に本を贈呈することや、“漫画デー”の設定、“読書は女子のもの”のような考えを持っている男子もいるため、多少ジェンダー差を強調してしまうことになるが、“ボーイズデー”の設定など。“読書は大切。読書は楽しい”という意識を身に付けるためには、できるだけ早い時期から本に親しむ体験をさせることしかないのかもしれない。

図書委員会生徒表彰式　マングズーカ高

ITトレーニングの修了証書とメダル授与

コロナ禍のピーク時には朝会が行われず、全校での図書活動推進のためのイベント開催も難しかった。当初、事業終了前に対象校全校の司書教師と図書委員会生徒がコミュニティーホールに集合して、活動の成果を発表したり、学びあったりするイベントを計画していたが、中止となってしまった。そこで、各対象校内で図書委員会生徒にITトレーニングの修了証書とメダルを贈呈し、１年間の活動を振り返る時間を作った。これは生徒たちにとって大きなモチベーションとなり、メダルを胸にかけ、証書を手にした生徒たちはとても誇らしげで、自信につながったようだ。

図書委員にサプライズ・ギフト

“図書委員会に参加するとちょっといいことがあるよ”という活動もあった。私の知人である長野在住の仲野桂子さんと友人の皆さんが素敵な手作りマスクを送ってくださり、図書委員会生徒に寄贈した。特にガーゼのマスクを受け取った生徒は、“日本のマスクはふわふわしていて気持ちいい”と話していた。何度も洗って色が薄くなってきてもいつもそのお気に入りのマスクを着けている生徒もいる。また、私の知人で姫路在住の谷登志朗さんからは、イベント用のキャップが残ってしまったとのことで寄贈いただいた。真夏の暑い時期の配布だったので、図書委員会生徒たちは大喜びだった。鮮やかなオレンジとブルーのキャップは生徒たちにとてもよく似合っていた。生徒たちにとってサプライズ・ギフトはうれしいものである。

継続する図書委員会の活動

事業の延長期間である2022年の第１学期が１月に始まり、対象校では、今年度の図書委員会メンバーの選定と活動計画に取り掛かった。委員会８名の中で卒業したり、他地域の学校に移ってしまったりした生徒数を補充するのだが、昨年度のメンバーの多くが継続して活動に携わってくれており、新入生への指導も行っている。昨年の事業開始時にはメンバーを総入れ替えした学校や、新メンバー選定に時間がかかった学校もあったが、図書委員会活動が定着してきたことで、今年はとてもスムーズに活動が開始できた。これは経験・継続による学びであり、来年以降もこのような形で委員会活動を引き継いでいって欲しい。

日本大使館から視察訪問

３月10－11日に在南ア日本大使館の柳楽書記官が、お忙しい中、事業の視察訪問をしてくださった。10日午後はELITSンベレ氏と三者会議を持ち、11日に対象校４校を訪問した。日本に興味がある生徒が多いUmalusi小へは、休憩時間に重なり、生徒たちから歓迎を受けた。同校の生徒はいつもしっかりと挨拶をしてくれるのだが、この日は特に男子生徒が柳楽さんをあこがれの目で見つめていた。空手やカンフー・スターのように見えたのだろう。小学校２校・高校２校、教室サイズの図書室２校・コンテナー図書室２校とバランスよく見ていただけた。校長や教師へはもちろん、生徒へも励ましのメッセージをいただき、皆一生懸命耳を傾けていた。彼らの心に強く残ったことだろう。学校からは感謝の気持ちをお伝えし、生徒からは音読の披露やメッセージのプレゼンテーション等があった。柳楽書記官には今回のご訪問は、昨年、日本企業や団体の紹介ビデオの作成を打診くださったり、横浜女学院の生徒さんたちとTAAAをつないでくださったり、大変感謝している。

３月末の事業終了後は、完了報告作成と提出の作業もかねて約２か月帰国する。その旨を学校に伝えたところ、“せめてモンドリだけでも訪問指導を続けて欲しいのに”とリクエストされてしまった。現地側では何といってもモンドリの熱心な仕事ぶりと活躍なくしては、ここまで活動を進めることはできなかったと確信している。

挨拶される日本大使館書記官の柳楽氏　ナニ高

楽しみながら読書に親しむ活動を！

６月からは対象校を引き続き訪問して図書活動へのサポートを行う予定だが、特に小学校低学年を対象に、“楽しみながら読書に親しむ”活動を行いたいと思っている。また、小学校数校で算数セットを利用した指導も開始する。コロナ禍で十分に勉強時間が取れなかったり、ローテーション登校でやる気が失せてしまったりした生徒に、おもちゃのような算数セットで刺激を与え、算数を理解し、好きになるきっかけになることを期待している。

中央大学杉並高等学校の生徒さんが

日本で海外ボランティア活動に参加！

中央大学杉並高校の皆さんが TAAA の活動に協力し届けてしてくださいました。書き損じ・未使用ハガキと切手の他に、ズールー語のラベルを貼った「ぐりとぐら」、“BigBeanie andthe Long long Beans”、“TheStory of the Little Mole”“Lend It to Me Please”など「両親が出てこない。仲間と力を合わせる」ストーリーを選び、英訳して作製して下さった本の数々、そして読書とは切っても切り離せない栞、それも一つ一つ見入ってしまうほどの色合いと凝った作品が16枚添えてあったのです。これを手にする南アの子ども達の歓喜が想像でき、自分たちでも独創的な栞作りを始めてくれることを大いに期待したいと思います。（大友深雪）

～生徒のみなさんの感想より～

■今までボランティアをやること自体少なかったのですが、特に海外に関するボランティアというのには全く触れたことがなかったので、体験出来て、自分のためにもなったし、海外の人のためにもなれてよかったです。今回、**絵本を英訳して海外の人に送るというボランティアを行った**のですが、わたしは高校生の私が今できる海外の人に対することというのは、寄付をするという間接的な方法しかないと思っていました。直接的なボランティアというのは海外に行って物資を支給したり、井戸を作ったり、技術を教えたりというイメージだったので、今回私たちでも出来る直接的なボランティアを知り、実際に行動出来て自分の視野がとても広がったと思いました。また、これらのことを活かして、次回からは自分で考えたボランティアを実際に行ってみたいなと思いました。

■人の為に何か出来たらいいなとは思っていましたが、ボランティアを本格的にやったのは今回が初めてでした。ホスピタルアートやビニール袋から作る手作りエプロンは自分たちでも簡単に作ることができました。一番苦労したのは絵本の取り組みです。絵本が集まらなかったり、翻訳を貼り付ける際に誤字が見つかって直したりと大変でした。けれどこの**絵本を小さい子たちが読んで喜んでくれるようにと丁寧に作りました。**自分でも無理なくできるボランティア活動だったので楽しめました。

■**絵本を英訳するという普段行ったことのない作業を行うこと**で良い勉強になったと思う。絵本に貼り付ける英文を印刷したプリントを切り取ってテープで貼る作業をするときでも、貼り付けたフィルムが絵本の端からはみ出さないようにするなど、細部にまで気を使った。同級生たちと協力して、団体に絵本を送り届けるようにできるところまでやり遂げたので、そこでも進歩があったと思われる。細かい手作業はあまり得意ではない私だが、楽しみながら提供された絵本に作業できた。

■私は、一学期の医療用のエプロン作りからずっとこのプロジェクトに参加してきました。部活の友達や先輩とビニールエプロンを作り、プロジェクトの同級生と絵本の英訳作業をしました。**どれもとても楽しく作業でき、相手方の反応もあり、やりがいのあるプロジェクト学習**でした。特に二学期の絵本の英訳作業は、自クラスのメンバーで役割分担をして、完成させることが出来ました。ぜひ、来年度もプロジェクト学習があるなら、またボランティアにしたいと思います。

■プロジェクトを選ぶ時に，ボランティアを見て、ボランティアって言われてみればあまりやったことがないかもと思い、参加を決めました。「ボランティアとは誰かに賞賛されるためのものでもないし、何かやってほしいことはありますかー!? と聞くものでもなく、**これをやって欲しいと言われたものに対して、ひっそりと行うものである**」という言葉が印象に残りました。

一学期に行ったホスピタルアートは、入院患者の方々に喜んでもらえるかな？ と考えながら作るのが楽しかったです。また、二学期に行った絵本の翻訳プロジェクトは、アフリカの子どもたち側に立って、どんな本がいいか考えたり、翻訳したりしました。私たちが送った本が、アフリカの子どもたちの宝物になってくれたら嬉しいです。

一年間を通して、ボランティアの本質を知れたり、自分からだったら参加しないようなことができて、**自分の世界が広がったなと感じました。**

■ホスピタルアートでは、金魚や着物の形の折り紙をつくりました。なかなか上手に折れなくて難しかったけれど、夏らしい作品がたくさんできてよかったです。絵本の翻訳プロジェクトでは、わたしたちのグループは「そらまめくんとながいながいまめ」を翻訳しました。**自分たちで英語を調べて訳したり、訳した文章を切って貼るのは時間がかかったけれど、楽しかったです。**作った折り紙や翻訳した絵本が誰かに喜んでもらえたら嬉しいなと思いました。

■ほとんどの作業を生徒だけで一から考えて本を作り上げられて、達成感がありました。**送る相手とは文化が違い、子どもたちには親御さんがいるのが当たり前ではない、ということを考慮し、家族愛が描かれていない本を見つけなければなりませんでした。外国の人々と上手にコミュニケーションをとるにはこのような相手の文化や状況を考える**ということが大切になってくるのだなと思いました。放課後仲間と残って本作りの作業ができたのはとても楽しかったし、やりがいを感じることができました。

■私は今まで自分からボランティアの活動に取り組んだことはなかったのですが、ボランティアをすることで**相手の方が喜んでくれると思うと、大変でも楽しみながらできて、思っていたよりも楽しく活動できました。**一学期にやった折り紙などは、小学生の頃に学校の活動で行ったりしていたのですが、ズールー語に翻訳した本を作成したりすることは初めてのことで、これからも自分で探さない限りやる機会がなさそうだと感じたので、とてもいい経験になったと思います。自分たちが今までやった活動が、役に立てていればいいなと思います。

TAAAと私

渡 恵美子

パラリンピックの聖火ランナーの時

TAAAとの出会い

春のふんわり柔らかな空気を感じ、私の記憶も少々ふんわりしていますが、私がはじめてTAAAを知ったのは2006年頃だったと思います。当時勤めていたNECソフトで「TAAA南アフリカ活動報告会」が開催され、南アフリカ共和国で移動図書館や農業支援をされているTAAAの活動に興味を持ちました。その何年か後に、会社の先輩だった丸岡さんに、ホームページ更新の手が足りない話を聞き、ぜひ更新のボランティアをさせてもらおうと参加しました。

私について

私は、12歳の時に発症したリウマチの影響で四肢に障害があり、高校生の頃から車椅子を使用しています。今は自宅のベッドか車椅子が主な生活の場で、家族をはじめ、介護士や看護師、リハビリの先生やハンディキャブのボランティア等の、多くの方の力を借りて生活しています。

ボランティアの手を借りることの多い私自身が、できるボランティアもあるというのは、嬉しかったです。私は東京に住んでいますが、家にいながら県境を越えてさいたま市のTAAAのホームページを更新し、国境を越えて南アフリカの子どもたちの読書活動やサッカー・農業といった生活に繋がっていると思うと、世界が広がったような心地でワクワクします。

教育は未来への架け橋

私は、高校を卒業した後、２年間のIT技術者在宅養成講座（東京都重度身体障害者在宅パソコン講習事業）を受講しました。ここでIT技術を習得したおかげで、IT企業、後にテレビ局での就労に繋がることができました。学ぶ機会を得られるかどうかで、未来が大きく変わることを実感しています。

南アフリカの子どもが手にする英語の本・算数セット・サッカーボール等も、彼ら・彼女たちの未来を広げているように思いますし、そうであることを願います。

TAAAで私がしている作業は、ホームページの更新という、ごくわずかな部分ではありますが、そうした未来に繋がるお手伝いができることを誇りに思います。

テレビとSNSを見る仕事をしています

私は、４年前からは、テレワークでテレビ局に勤めています。テレビ番組に対してどんな感想がつぶやかれているか、主にSNSでの反応を見る仕事をしています。テレビが大好きなので、視聴者の声に目を通し、レポートを作成する作業は夢中になれます。

昭和50年代生まれの私は、子どもの頃、「ザ・ベストテン」に出演されるアイドル松田聖子さんに憧れ、「８時だョ！全員集合」のコントに笑い、テレビのキラキラした世界が大好きでした。

それから数十年が経ち、子どもの頃憧れていた世界を身近に感じて働けることが幸せです。

そんなテレビ好きの私が、近年最もはまったドラマは「MIU404」です。女性・外国人技能実習生・若者のドラッグ等の社会問題に切り込み、被害者と加害者が複雑に入り組む切ないストーリーの中にも、人の心を温かく灯す光が、セリフにも映像にも感じられ、現代の自分が大事にすべきことは何かを考えさせられるドラマでした。

バラエティ番組では「世界くらべてみたら」が好きです。国による違いや共通点が興味深く、どの国も愛おしく感じます。そして、笑顔は世界共通で、癒されます。

仕事をするうえで、大切にしている言葉は「楽しんで」。これは、上司に最初にもらったアドバイスです。楽しむことで、仕事時間がかけがえのないものに感じ、成果物もより良くなり、生活が豊かになったように思います。

ホームページの更新は楽しい

TAAAのホームページを更新する作業も楽しいです。原稿や写真をメールで送付いただき、ホームページに反映させます。

南アフリカの子どもたちの笑顔の写真や、前向きな作文を読むとパワーをもらえます。

主に「メモ帳」のアプリで、HTMLやCSSを記述して更新します。HTMLやCSSは、文字列を変えることで表示が変わります。「red」や「#FF0000」を指定すると赤が表示されます。文字列をいじり、「blue」や「#0000FF」と変えると青色になります。ちょこちょこいじって、どれが見やすいかと考えるのは、頭の体操になっています。

私は、アビリンピックのホームページ競技に挑み、技術を競ったこともありました。アビリンピックとは、障害のある人々が、日頃培った技能を互いに競い合うことにより、職業能力の向上を図るとともに、障がい者への理解と認識を深めてもらい、雇用の促進を図ることを目的として開催される大会です。

思っていた以上に参加者の技術力が高く、刺激になり、私も頑張ろう、と励みになりました。

感謝の気持ちを込めて、東京2020パラリンピック聖火ランナーをしました

昨年の8月23日に、東京2020パラリンピック聖火ランナーとして、世田谷区にある都立砧公園ねむのき広場で聖火を運びました。車椅子に専用アタッチメントでトーチを固定してもらい、車椅子は母に押してもらいました。とすると、私は座っているだけともいえますが、心は感謝の思いでいっぱいです。

今まで多くの方に支えてもらえたことで、学ぶことができ、楽しく働くことができています。その感謝の気持ちを伝えたくて聖火ランナーに応募し、温かな環境で聖火リレーをしたことで、私自身がまた大切な思い出が増えて、感謝することが増えました。

身体障害を持ったことについては運が悪いと思いますが、それ以上に、親切な人たちと出会え、かけがえのない友もでき、大好きな仕事にも巡り会えたので、私は幸運な人生だと思います。

アビリンピックに挑んだ頃

世界と繋がっていたい

TAAAの活動では、私はメールやオンラインで参加しているため、バーチャルのような存在かもしれません。　南アフリカも、私はまだ訪れたことがありません。

でも、いつか、南アフリカで、現地のスタッフや子どもたちやケープペンギンにもお会いしたいです。私の夢の1つです。

海外には興味があり、10年くらい前までは、海外旅行にも行っていました。アメリカ、オーストラリア、フランス、中国、ロシア、韓国、台湾、どの国や地域の方も親切でした。車椅子で段差を越えられずに困っていると、抱え上げてくれました。どの国の方も、温かい気持ちを持っていると感じました。どの国も、良い思い出になりました。

しかし、今ニュースを見ると、世界では、人の命が脅かされる悲しい出来事が起こっています。人が人を傷つけることがなぜ起こってしまうのかわからず、胸が痛く、自分の無力さを感じます。

これからも、自分にできることはわずかかもしれません。今までの人生・これからの人生で受け取る親切の何十分の一も返せるかわかりません。でも、自分のできることを、小さなことから見つけて、継続したいと思います。

平和な世界で、誰もが教育を受けられ、自由に夢をみて、努力して、好きな仕事に就き、家族と幸せに暮らす。こんな、当たり前のようなことが、とても尊いと感じます。

誰もが、平和な世界で、当たり前に夢を持って、幸せに暮らせるようになることを祈ります。そして、自分のできることをこれからも続けていきたいと思います。

～ストリートチルドレンにサーフィンを指導する～

サンディーレさんにインタビュー！

SNSC（Surfers Not Street Children）はダーバンをベースにサーフィンを通して子どもたちにライフスキルを学ばせる活動を行っている団体です。TAAA 南ア事務所の平林のパートナーで、SNSC のプログラム・ダイレクターである Sandile Cyril Mqadi サンディーレ・シリル・ムカディ（写真中央）にインタビューしました。サンディーレは数回、来日。TAAA 報告会で講演。（平林薫）

平林：SNSC の活動の意義・目的は？
サンディーレ：厳しい環境に置かれている子どもたちがサーフィンを通して新しい世界を体験することで目や心を開き、まっすぐに成長していかれるようサポートを行っています。昨今は多くの子どもたちが家庭やコミュニティーであらゆる虐待を受けるなど、とても危うい状況にあり、そのままでは彼ら・彼女らが虐待する側になってしまう悪循環に陥ります。サーフィンを通して楽しみながらライフスキルを学び、私たちが生きていく中で最も大切な他に対するリスペクト（敬意）を身につけさせることが活動の目的です。

平林：実際の活動はどのように行われているか。
サンディーレ：ダーバンのビーチにサーフボード等機材を保管するスペースがあり、スタッフが常駐しているので、基本的にいつでもサーフィンをすることができます。現在は家族でホームレス用シェルターに住んでいる子どもが多く、彼らは学校に通っているため、放課後にサーフィンを習いに来ます。また、ビーチの近くにサーフハウスがあり、そこではランチの提供やコンピュータースキル、ヨガのレッスンなど、様々なイベントが行われます。ストリートに寝泊まりしている子どもや若者へのサポートとして、アウトリーチ・プログラムでソーシャルワーカーと共に定期的に食糧を届けています。そして、海や自然に対してもリスペクトを持つことをビーチのごみ拾いなどの活動を通して学ばせています。

平林：今回、団体が米国のウェットスーツ会社 O' Neill にスポンサーされることになった経緯は？
サンディーレ：プロモーションビデオにも登場するプロサーファーの Jordy Smith（ジョディー・スミス）はダーバン出身で、彼が地元の学校対抗サーフィンコンテストで活躍している頃から知っています。彼が O' Neill のプロライダー

ということで、ダーバンの団体が選ばれたのだと思います。企業の社会貢献と、より多くの人々にサーフィンを理解してもらうきっかけ作りとも言えるのではないでしょうか。

平林：ダーバン周辺では SNSC の活動が広く認識されてきているようだが。
サンディーレ：先週の日曜日（3月20日）には74人の子どもたちがプログラムに参加しました。たまに休みを取ると“コーチ、なんで今日は来てくれなかったの”とメッセージが入るくらい（笑）。クワマシュなどの居住区からも親が車で子どもを連れてくることもあります。あとは障がい者の施設から目の不自由な若者や片足を失った若者もサーフィンのプログラムに参加しているのですが、彼らの運動能力は素晴らしいです。最近では、プログラムに参加している15歳の女の子が5月末にエルサルバドルで開催されるサーフィンのジュニア世界選手権に招待されました。でも、どのスポーツも同様ですが、プロになるのはとても厳しいので、子どもたちにはしっかりと学校で勉強して自分のキャリアを考えるように話しています。

団体が提供するランチをほおばる子どもたち

サーフィンイベント後の表彰式

【日本国】　TAAA会員とボランティア

9月～3月　本の受け取りと保管　北爪健一
9月～3月　ホームページの管理・更新など　渡恵美子　久我祐子
8月～9月　会報78号の編集・校正　野田千香子　久我　西村裕子
9月～3月　会報78号の発送準備と郵送　野田
9/23　作業と理事会　久我　浅見克則　大友深雪　野田
丸岡晶　　本の寄贈に見える　今村嘉宏
10/17　作業　久我　大友　野田　津山直子
9/23　臨時理事会 出席　久我　野田　浅見　丸岡　大友
10/6　外務省N連事業変更承認申請書 提出　久我
10/24　プロジェクトマネージャーとZOOM会議　久我　平林
10/25　ひろしま・祈りの石国際教育交流財団助成事業申請書の提出　久我
11/21　作業　大友　浅見　野田　高野千恵美　小林大輝
11/25　算数セットの活用法　学習会　久我　大友
12/14　プロジェクトマネージャーとZOOM会議　久我　平林
12/19　作業と臨時理事会　久我　浅見　丸岡晶　大友　野田
12/27　算数セットの使い方　ビデオ撮影　久我　大友　久我淳
1/10　プロジェクトマネージャーとZOOM会議　久我　平林
1/12　NGOクワトロとZOOM会議　久我
1/16　作業　浅見　大友　野田　久我　小林
2/3　段ボール搬入　浅見
2/20　作業　久我　大友　浅見
2月下旬　会報78号送付のための住所ラベル準備　西村
3月上旬　78号編集企画　野田　久我
3/4　梱包作業　国際小包発送　大友　久我
3/14　在南ア大使館とZOOM会議（N連）　久我　平林

【南アフリカ共和国】　平林薫と南アフリカのスタッフ

9/16-17　学校巡回訪問、図書委員会生徒へのITトレーニング、図書活動進捗確認。
9/20-23　学校巡回訪問、今学期のIT指導まとめ、図書活動進捗確認、学校寄贈用本の箱作り。
9/27-30　学校巡回訪問指導、本の寄贈、郡教育省主催のディベート・コンテスト出席、Frankland小司書教師のお別れ会出席。
10/1　書店で本の注文と物品購入。
10/4-8　学校が春休みのため、第3学期活動のまとめ、寄贈用本の箱作り等。
10/11-15　学校巡回訪問指導、図書委員会生徒と今期の活動計画、本の寄贈と受け入れ登録作業。
10/18-22　学校巡回訪問指導、寄贈用本の箱作り、物品購入等。
10/25-29　学校巡回訪問、図書委員会生徒へのITトレーニング、本の配布と受け入れ登録作業。
11/2-5　学校巡回訪問、図書委員会生徒へのITトレーニング、本の配布と受け入れ登録作業。Nani高でブックレビューコンテスト参加者表彰。
11/8-12　学校巡回訪問、図書委員会生徒へのIT指導まとめ、本の配布と受け入れ登録作業。Umalusi小でブックレビューコンテスト参加者表彰。図書委員会生徒贈呈用物品の購入。
11/15-19　学校巡回訪問、図書活動進捗モニタリング。ITトレーニング修了証書作成、図書委員会生徒用メダル等の準備。修了証書とメダルの贈呈開始。
11/22-26　学校巡回訪問、図書委員会生徒へのITトレーニング修了証書とメダルの贈呈、今年度の活動の振り返りと来年の計画等話し合い。
11/29-12/3　学校巡回訪問、図書委員会生徒へのITトレーニング修了証書とメダルの贈呈、今年度の活動の振り返りと来年の計画等話し合い。Imbalencane小7年生の卒業式出席。
1/17-21　学校巡回訪問再開、今学期の活動について説明と話し合い、本の寄贈。他地域の小学校2校への本の寄贈と図書活動へのアドバイス。
1/24-28　学校巡回訪問指導、新年度の図書委員会メンバー確認。ITトレーニング。
1/31-2/4　学校巡回訪問、前年度の図書委員会生徒へのモニタリングテスト、新規メンバーへの研修。
2/7-11　学校巡回訪問、前年度の図書委員会生徒へのモニタリングテスト、新規メンバーへの研修、本の受け入れ登録作業。
2/14-18　郡教育省ELITSンベレ氏と共に対象校の図書活動モニタ リング訪問。図書委員会新規メンバーへの研修、ITピア指導の進捗確認。
2/21-25　学校巡回訪問、図書委員会新規メンバーへの研修、本の受け入れ登録作業、ITピア指導の進捗確認。ドゥエシューラ学区長のザミサさんと会議。
2/28-3/4　学校巡回訪問、図書活動及びITピア指導進捗確認。
3/7-10　学校巡回訪問、図書委員会メンバーからIT指導を受けた生徒へのテスト。
3/10-11　在南ア日本大使館・柳楽書記官が事業視察訪問。10日にELITSンベレ氏との会議。11日に対象校4校を視察訪問。
3/14-15　柳楽氏・久我代表と3者ズーム会議。学校巡回訪問、図書委員会メンバーからIT指導を受けた生徒へのテスト。司書教師へのアンケート調査。

ハガキ・切手ご寄附の御礼と引き続きのお願い

皆さまからご寄附いただいた未使用・書き損じハガキと切手を活用し、11月～3月の4か月間で、段ボール12箱、合計667冊の英語の本を国際小包船便にて南アに送ることができました。ありがとうございました。

現地では小学生用の本が大変不足しているため、今年はコンテナ船での一括輸送の前に、出来るだけこまめに国際小包でも本を届けたいと願っております。
送料の負担を軽減するため、引き続き書き損じハガキ、未使用ハガキや切手のご寄附をお願い致します。一枚から受け付けております。また、送料用として、少額からのご寄附金も大変ありがたいです。
ご支援ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

送り先住所
〒330-0855　さいたま市大宮区上小町1327-208
「アジア・アフリカと共に歩む会」
連絡先　090-9957-2256